送放

皇國に於ける觀世音の信仰

宮中顧問官
海軍中將 子爵 小笠原長生述

特279
365
特279-365
*76W10973 *

始

皇國に於ける觀世音の信仰

第一講　宗教と國體……一
　　觀世音菩薩の本性……六
　　法華經と普門品……八
　　觀世音菩薩の御活動……一〇
第二講　感謝と敬虔……一三
　　觀世音菩薩と日本……一三

昭和十三年
大東亞學校
76W10973

皇國の成立……一四
神々と佛菩薩……一八
本地垂迹論……二〇
觀音の應現……二三

第三講

觀音妙智力……二五
宗教的日本魂……二七
大乘的信者の念願……二八
田村麿將軍と東郷元帥……二九
觀音信仰の一水兵……三三
國の力は信仰にあり……三六

皇國に於ける觀世音の信仰

海軍中將子爵 小笠原長生述

第一講

宗教と國體

日蓮聖人は、信徒の南條兵衛七郎といふ者に與へた書中に於て、

「**法は必ず國をかんがみて弘むべし、彼國によかりし法なれば、必ず此國にもよかるべしとは思ふべからず**」

と諭してゐる。此の場合、法といつたのは、宗教と合點すればよろしからう。即ち一宗教を弘めようとするなら、まづ其の宗教の性質が、其の國體に合致してをるか

否かを、穿鑿してからにすべきで、甲の國に於て、國家を益し、人心を指導した宗教だからといふて、直ぐにそれを乙の國に移しても、必然その通りになるだらうと思つてはならぬとの主張で、私も實にこれに同感なのであります。他國はいざ知らず、苟も皇國臣民たる者は必ず國家に立脚して、宗教を批判すべきで、決して宗教に立脚して國家を批判すべきではあるまいと思ひます。

そこで斯ういふ觀念に基いて、觀世音菩薩を考へ究めてみると、皇國の宗教として、洵に似付かはしいものであります。

觀世音菩薩の本性

いつたい觀世音菩薩といふ菩薩の本性はどんな方かと調べてみると、その梵語に「アバローキテイシュバラ」(Avalokitesvara) といふので、是は「アバルキタ」といふ言葉と、「イシュバラ」といふ言葉とを一緒にしたもので、「アバルキタ」とは、

觀らるゝ、若しくはあらはされるといふ言葉。「イシュバラ」といふ語は、絶對を意味し、自在を意味し、最上を意味し、法身を意味し、眞理を意味するから、此の二語を合すると「あらはされたる眞理」となる。これが觀世音の原語の意義であると私は解して居ります。處で何物も眞理より生れないものはないから、從つて觀世音のことを七億の佛の母といふ理由も判然して、又、觀世音がありとあらゆるものに身を變じて、衆生を救ふといふことも、實は萬物を生育愛護する眞理の本能を、暗示したことが判るでありませうし、日天子といふ別名のあることも首肯かれます。日天子といふのは、太陽の本性を觀音と見做したのでありますから、從つて森羅萬象、彼ありて始めて存在し得ることを示して居るのであります。

斯の如く――觀世音は眞理そのものなので、從つて餘りに高く餘りに大きく、そのまゝでは普通の人間の觀念を超越してしまふ程隔りが甚しいから、そこで方便として如來などよりも位置の降たる菩薩として現されることになつた。それが今日、

吾々が崇信してをる觀世音菩薩なのであります。菩薩といふのは、上に向つては自身の修業を勵んで、ます〳〵道の大成を期し、下に向つては、ありとあらゆる生物を救はうとの誓願を持つてをられる方で、いはゞ佛と凡人との中間に介在してゐるので、從つて佛よりも人間との距離が近く、親しみも一層深い方なのであります。

大悲心陀羅尼經といふ經文を見ますと、その中に

「觀世音菩薩は不思議な力を有つてゐて、その本體は正法明如來といふ佛であるが、大慈悲の願を起して、衆生を安樂ならしめようと思ひ、それがために菩薩と現はれるのだ」

といふ意味が記されてあります。此の正法明如來といふも、眞理を假に佛と見做したもので、正法明とは正しき法が明と書き、取りも直さず正大公明な、をきてをさしたものであります。又、如來の如は、眞如、卽ち眞理であり、來とは活動の意味である。故に正法明如來とは、正大公明なる眞理の活動體、といふことで、前に述べた觀世音の原語「アバルキテイシュバラ」の意義たる「あらはれたる眞理」といふのと全く同一なので、それが衆生を救ふために菩薩と現れるといふのは、私の前に述べた所を、別の說方で證據だてゝゐるに他ならない。

斯樣に觀世音菩薩は、衆生を救はんが爲に、自ら進んで最上最尊の地位を拋ち、菩薩の位に降つて、大慈悲の誓願を果さうとせらるゝその一事が既に已に、多大の敎訓を我々に齎して居ります。われ〳〵凡夫は動もすると、功名心に驅られ自己の力も量り得ずして、分に過ぎたる榮達を願ふのあまり、或は人を押しのけたり、嫉んだり、羨んだり、我れと我身を、煩惱の焰に燒いて悶え苦しみ、終には全く邪道に陷つて、身を亡したりするのであるが、こんな淺ましい我々でも、前に述べたような、觀世音の身を落して他を救はうとされる、大慈悲大愛に想到すると、何とも言へぬゆかしさを感じ、從つて多少に拘はらず反省を促がされるので、私はこれを觀世音が人間に齎らす、劈頭第一の敎訓だと信じて居ります。

法華經と普門品

仍て菩薩としての觀世音を說いた經文は、その數實に夥しく、六十餘種を算するのでありますが、その中でいづれが基礎的經文であるかといひますと、それは妙法蓮華經――略して法華經と申しをる中の、觀世音菩薩普門品第二十五、といふのがそれであつて、此の一品だけを、特に觀音經とさへ稱して居る程であります。

一體妙法蓮華經といふ經文は、經文中斷然王座を占めてゐるもので、釋迦牟尼佛が此世に出られたのも、法華經を說くのが大眼目であつた、とさへ言はれてゐる程で、既に法華經中の法師品では、釋尊自ら、

「我が說く所の諸〳〵の經あるも、而も此の經の中に於て法華最も第一なり」

と宣言し、同じく安樂行品でも

「此の法華經は諸佛如來の祕密の藏なり、諸經の中に於て最も其の上にあり」

と斷定し、同じく藥王品では、

「佛はこれ諸法の王なるが如く、此經も亦復是の如し、諸〳〵の敎の中の王なり」

とも言ふて居られます。

されば日蓮聖人の如きは、本尊供養鈔の中で、端的に

「法華經の文字は六萬九千三百八十四字、一々の文字は我等が目には黑き文字と見え候へども、佛の御眼には、一々皆御佛也」

と絕叫し、文字だとか、經文だとか、いふような生溫い見方では駄目だ。その悉くが皆血が通つてゐる生身の佛であるぞ、と弟子や信徒に敎へてゐるし、又、支那の小釋迦といはれるまでに、大乘佛敎の偉勳者たる天台大師も、日本天台宗の鼻祖たる傳敎大師も、法華經に絕對歸依を捧げて尊重せられて居り、殊に天台大師は、その全部二十八品の中より、大切中の大切な品として、四品を擧げて居る、その中の一つが、實に觀世音菩薩普門品、卽ち觀音經なのであります。

觀世音菩薩の御活動

その普門品に於て釋尊は、極力觀世音の衆生を濟度する功德の廣大なるを讃め稱へられて居り、既にこの普門といふ品の名に於ても、それを示して居られます。卽ち普といふのは「何處へでも」といふ意、門は往來の意であるから、普門とは何んなところへでも往つて、衆生を救ふことを示されたので、本文の偈の中にある「十方諸〳〵の國土に、刹として身を現はさゞることなし。」といはれたのと同意義でございます。

さて此の普門品の本文に於て、釋尊が何といふて、觀世音を讃歎せられてゐるかと申しますと、衆生が何んな災難に遭はうとも、一心に觀世音の御名を稱へたなら、觀世音は響の物に應ずるが如く、直ぐに救つて呉れる、何故ならば觀世音といふ方は、大慈悲心を有し、大智慧を有し、大勇力を有し、機に臨み變に應じて、此

の大慈悲心、大智慧、大勇力を無限に發輝し、縱横自在に働かすのであるから、此の菩薩を信ずる者は、大火も燒くことが出來ず、大水も溺すことが出來ず、惡鬼羅刹も害を加へることが出來ず、杻、械、枷、鎖も繫ぐことが出來ず、毒藥も毒を利かすことが出來ないであらう。斯樣に災難を救つてやる許りでなく、心の惱みも拔いてくれるし、いろ〳〵な福德を與へられると、實に有難いことづくめなのでありますが、そうして頂くには、三つの條件があることを忘れてはならない。それは外でもない、前述の如く一心に觀世音の御名を稱へると同時に、心で歸依し、心で歸依すると同時に體で歸依し、口と心と身と合體したる絕對歸依を捧げるといふ、大勇猛心を起さねばならぬのであります。

以上の釋尊の觀世音菩薩に對する御說明を、よく〳〵味はつてみたら、同菩薩がザラにある月並の菩薩とは、全く選を異にしてゐることが判然するだらうし、加之無限に身を變じて救の實を擧げる、其のお働きを達觀し來ると、それが宇宙の大道

卽ち眞理の活現であることも、首肯かれるでありませう。

以上の外に此の品に於て、最も大切な事が二つ實現せられてゐます。その一つは「感謝」で、他は「敬虔」であります。

感謝と敬虔

先づ感謝に就て申しますと、觀世音の功德廣大なるを力說せられた、釋尊のお言葉を承つた無盡意といふ方は、感謝の念に堪へられなくなつて、非常に高價な頸飾を脫して、これを觀世音に捧げやうとした。併し觀世音はこれを受けようとしない、が無盡意は更にひるまず、どうぞ吾等を憐まれて、この供養をお受け下さいと、ます〳〵熱心に供物を捧げるので、傍でこの狀況を見て居られた、釋尊も、氣の毒になられ、觀世音に向はれて、「あんなに熱心に言ふのだから、その供養を受けられたら如何です」と勸められたので、それではと、觀世音も終にその頸飾を受けら

れたが、敢てそれを私せず、二分して多寶如來と釋尊に奉つたとあります。

この多寶如來といふのは、これも正法明如來と同樣、眞理を表徵したもの。釋尊は、智慧を以てその眞理を覺り、眞理と一體になつたもの。然しその眞理を實地に活用する我が觀世音は、二佛と一體なのであるぞと、暗に吾が身が眞理の化身なることを示してゐるのであります。此の無盡意の感謝と、觀世音の敬虔な態度、これが大慈悲、大智慧、大勇力の三者と並んで、この品の大切な着眼點であることを記憶せねばなりませぬ。

感謝と敬虔。この二つは實に佛敎精神の根柢をなすものであつて、例の四恩、卽ち君の御恩、父母の恩、衆生の恩、天地の恩に報いるといふことも、感謝の念から起るので、此の念が無かつたら、決して報恩といふことが、實現される譯のものではありませぬ。

又、これと並んで敬虔の念といふことが大切で、どんな者に對しても、その相手

も何時かは佛になり得る素質を持つてをる者だとの、觀念のもとに、敬虔を以てこれを遇し、惡虐の者をも、恥ぢて反省せしめんと仕向けるのが、佛敎信者の覺悟であります。觀世音はこれ等の事を一々實例を以て我々に敎へて居ることを痛感し、深く〳〵これを服膺せねばなりません。

第二講

觀世音菩薩と日本

前講で申し述ました通り、觀世音菩薩の本地は、眞理そのものであつて、それは普通の人間の觀念に入るべく、あまりに高くあまりに大いので、自ら地位を落して菩薩と現れ、もつて衆生濟度の本領を達成しやうとせられるのでありますが、いくら菩薩になられたからといふて、その本來の性質は變らう筈が無いので、依然眞理を體とし、働としては日天子とも現はれ、宇宙の所在ものを、生育てるといふ、大慈悲を發揮せられるのでありますから、もしその濟度の手段として、人間界の何處かに、活動の根據地ともいふべき靈域を求める必要ありとするならば、それは當然眞理そのまゝが、國家となつて現れた邦でなければなりませぬ。さうして夫れに適ふ邦といつては、世界の何處を探しても、我が日本より外にはないのであり

ます。

皇國の成立

謹みて皇國の成立を尋ね奉るに、眞理の當體として根本的大靈たる天御中主神、その活現たる高皇產靈神、神皇產靈神たちが、伊邪那岐、伊邪那美二柱神に、瓊を以つて飾れる所謂天の沼矛を賜ひ、

「我が靈魂は此の矛に留りて、汝等が、このたゞよへる國を、修理固成を守護するゆゑ、此の矛を見ること猶吾を見るが如くせよ。」

と宣せられました。此の精神を受繼がれた、伊邪那岐、伊邪那美の二柱神は、更らに、その御頸にかけられたる瓊を、天照大神に賜ひ、

「我が靈魂は天御中主神たちの御靈と共に、この御頸珠に留りて、汝の所業を守護するゆゑ、此の御頸珠を見ること猶吾を見るが如くせよ。」

との御意を傳へられました。

さうして矢張り、この御精神を、お受繼になられた天照大神は、更らに、八咫の御鏡を天忍穗耳尊に賜ひて、

「わが御魂は、天御中主神と共に、この御鏡に鎭まりて、永久に、天津日嗣の天皇を守護すべし、此の御鏡を視ること、猶吾を視るが如くせよ。」

との大御心を傳へ給ふたのであります。

以上の三御神敕に基づき、茲にかの「天壤無窮」の大御神敕が、天照大神より皇孫に御授けになつたので、卽ち天皇は、たへず、國土文化を、お造りになり、御固めなさる御天職にあらせられ給ふ御方樣なのであります。先輩今泉定助翁は、其の著「國體原理」に於いて、

「我が日本の天皇とは、宇宙根本大本體としての、天御中主神の直系的延長身たる、伊邪岐、伊邪那美の二神が此の世界を創造し、修理固成し給ひし邦土と

その子孫とを、天照大神に授け給ひ、天照大神はその邦土と子孫とを、總合調和統一主宰して、繼承したる御身にましまし、其の直系の御子孫は、天津日嗣として、御代々々の邦土と子孫とを、そのまゝに繼承しつゝ、發達し來りたる天皇にまします。」

と云ひ、更らに三種の神器の解釋については、

「寶鏡の神敕は、天の沼矛の神敕と、御頸珠の神敕とに淵源して居るのである。此の天の沼矛と、同一の精神を象徴するのは草薙劍であり、御頸珠と同一の精神を象徴するのは、八坂瓊曲玉である。故に寶鏡、寶玉、寶劍の三神器は、不三一體の關係にあるもので、等しくこれ靈魂相續、天津日嗣の象徴である。これが本質をなすものは、修理固成の神敕、御頸珠の神敕、天壤無窮の神敕、神籠磐境の神敕等に包藏せらるゝ精神である。即ち、宇宙の眞理と一體なる產靈の精神、之を人生社會に顯現する生成發展の大原理である。」

と論斷してをります。これは洵に適切な言で、即ち天津日嗣の日は靈魂の靈即ち「ひ」にあたり、御歷代の天皇の大御心は、取りも直さず、眞理の本體たる天御中主神の御精神で、即ち眞理の御活現として、斷えず國土文化を御創造御發展あらせられるのであります。

神武天皇は其の御詔敕の中で、

「皇孫正を養ふの心を弘めむ。」

と曰はせられて居る。たゞしき即ち正といふ文字は、一の字の下に止るといふ字を書くので、一と止るといふ字の合した文字であります。然うして、其の意味は、一を守つて動かないといふことであるが、さて、その守るところの一とはなんであるかといふと、唯一つの道、即ち眞理でありまして、言ひ換へると、眞理以外には絶對に出ないのが正なのでありまして、これ亦天御中主神の大精神を、確りと守らせ給ふことなのであります。

斯様な次第ゆえ、天皇の御天職と申さば、啻に皇國の治しめさるゝ許りでなく、實に世界に對し、眞理をお示しあそばされて、ありとあらゆるものを生し育て、以つて眞の幸福をお與へ遊ばさるゝにあるのだと存じ奉ります。

神々と佛菩薩

さて、話は觀世音に戻りまして、先に申述べました通り、觀世音の本性が、正法明如來といふ眞理の活現體である以上、正しくこれは、眞理の本體たる天御中主神の御精神中に融合せらるべきで、たゞ此處に、豫め合點し置かねばならぬことは、皇國固有の神々と、外國より渡來の佛菩薩との關係を如何に解釋すべきかの點であります。

佛教家の中でも、行基菩薩等は、最も之に力を濺ぎ、遂ひに本地垂迹の說を唱へて、神佛の調和を計つたのであります。本地といふのは本の體、垂迹といふのは必

要に應じて假りに現れた分身を指したのでありますが、これなら神佛中、どちらを本身、どちらを分身と認めたかと申しますと、何處までも佛の方を本身とし、神を分身と觀たのでありますから、佛あつての神と云ふことになるので、どうしても、私共の同意し難い結論となるのであります。そこで例の弘法大師空海は、これに與せず、始めて金剛界、胎藏界の兩部神道を唱へて、神佛の一體なることを說き、日本に現れては神となり、天笠に顯れては佛となり、名は異つて居るが、本體は同一であり、諸佛諸菩薩と、八百萬の神々との間には、決して勝劣はなく、共に諸人に利益を與へ、萬民を加護するの功德を具へてゐると、極力主張したのは、洵に適切な論だと思ひますが、本迹一體と云ひ、本地垂迹の勝劣なし、といつてゐる所を見ると、まだ〳〵從來の本地垂迹說を全く脫却して居るのではない。從つて本迹一體とは言つて居るも、詮じつめれば、矢張、佛は本地で、神は垂迹といふ、觀念に囚はれて居ると思ひます。

本地垂迹論

處で私は、此の本地垂迹論を、反對に主張したいのであります。卽ち我が神々が本體であらせられ、これが俗に應じ風を察して、天竺に於いては佛や菩薩と現れ、支那に於ては、孔子や老子と現れ、エルサレムに於いてはキリストと現れ、メッカに於いてはマホメットと現れ、以つてこの所々に於ける大衆を、救濟しやうとの、大慈悲の發動と考へたいのであります。

斯樣に考察して、さて觀世音の大慈悲を檢討すると、一層味はひが出て參ります。卽ち、彼も是も共に眞理の活動を意味するのみならず、神武天皇の正を養ふと曰はせられた、その正の字は、觀世音の本體たる、正法明如來の正の字と同文字でいづれも唯一の眞理を守つて、それに止まる字義であり、內容であるので御座います。

されば、もし觀世音が、所在生物を救ふための根據地を、此の世界の中に求めるとしたなら、いよ〳〵わが皇御國を措いては、他には絕對にないのであります。但し、云ふまでもなく、觀世音は、印度にその源を發して、多大の信者を有し、更らに支那に移つても、大いに尊崇せられて、これ又澤山の信徒を得たのでありますが、どうもこれ等の信仰の狀況は、小乘的であり、利己的であり、消極的でありまして、觀世音本來の念願たる、大乘的見地に立つての活動振りは、充分發揮せられて居らなかつた。然うしてそれが我邦への渡來によつて、始めて達成し得たのであります。

皆樣も御承知の通り、歷史に據りますと、欽明天皇の十三年に、佛敎が渡來したが、それより二十六年を經た敏達天皇の六年、卽ち今より千三百六十有餘年前に、始めて羅什譯の法華經、精しく言へば、妙法蓮華經が、傳來したとあります。處で觀世音の基礎的經文ともいふべきは、先にも申しました通り、此の法華經中の、

觀世音菩薩普門品なのでありまするから、皇國に於ける同菩薩の信仰は、佛教渡來と殆んど同時に、發生したものと見て宜からうと思ひます。

然うして其の信仰は、實にすさまじい勢ひを以つて、年と共に傳播した。尤もこれには、歴代の御皇室の、同菩薩に對する御信仰の篤かつたことも、主なる原因の一つとなつてゐるので、例へば、聖德太子の如き、其の御信仰の中心は、法華經であるが、更らに一歩を進めて拜察すると、これは實に觀世音菩薩に對する、御信仰が基礎をなして居り、それが餘りにも御熱心であつたがため、同太子の御本體は、觀世音であらせられる、といふ觀念をさへ、國民に抱かせるやうになつた程で、從つて、概括的に申しますと、當時の、朝野兩方面に於ける佛教信仰の中心は、實に觀世音であつたのでありまして、これが引續き、奈良朝、平安朝を通じて、後世になる程、ます〳〵盛んになつていつたのであります。

觀音の應現

一體經文の中に出てくる、如來や菩薩の數は、夥しいもので、佛名經といふ經文には一萬千九十三の佛を擧げ、更らに他の一種には、一萬三千餘の佛名を列ねて居るが、これはホンの一部分で全體を云ふなら、實に無數であるが、この中に於いて、觀世音ほど一菩薩にして、色々な姿になつて顯されてゐる方は他にありません。

例の六道卽ち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の濟度を分擔してをられるところの、千手觀世音、聖觀世音、馬頭觀世音、十一面觀世音、准胝觀世音、如意輪觀世音の六體を始めとして、二十五觀音だの、二十八觀音だの、三十三觀音だの、四十觀音だのと、澤山の種類がある。

但し、これは有限數を擧げて無限數を示したもので、觀世音の本領から言へば、機に臨み、時に應じて、無限無數に變化し、以つて有情非情を、悉く救濟せんと

せらるゝので、此の見地から觀察するなら、宇宙の森羅萬象一として、觀音の應現ならざるなしとなるのであるが、この議論は姑く措くとして、澤山な種類の觀世音の中には、我が邦に於いて、案出されたものさへあります。卽ち、子安觀世音、子育觀世音、合掌觀世音、方除觀世音などがこれでありまして、斯樣な次第に立至つたのも、偏に觀音信仰が盛んである、證據の一つとなるのであります。

殊に又面白く感ぜらるゝのは、觀世音の別名を、南海大士といひ、南海菩薩といひ、慈航大士ともいふて居る。南海はみなみのうみ、慈航の慈はいつくしみ、航はわたるで、卽ち海上を守護する意味になるから、この點より申しても、海國日本に於いて信仰せらるゝのは、當然であるやうに思はれます。

第三講

觀音妙智力

觀音經の偈の中に、

「衆生困厄を被りて、無量の苦、身に逼るとも、
觀音の妙智力は、能く世間の苦を救ひたまふ。」

といふ句があります。此の妙智力の三字は、實に大切な文字で、詮じ詰めると、觀音經は愚か、五十餘種もある同菩薩に關する經文の意義は、凡て此の三字に盡きてゐると申しても宜い程なものであります。

然うして夫れは啻に觀世音に就いてのみでなく、信者自身にあてはめても亦、此の上もない重要な語であることを忘れてはなりませぬ。

そこで先づ觀世音と此の三字との關係より述べることに致します。

妙とは、言葉にも言ひ顯はすことが出來ず、筆にも書き顯すことが出來ないと云ふ不可思議の意義を有すものを指したので、卽ち觀世音の本性たる眞理のことなのでありますが、前講にも申した通り、それはあまりに大きく、あまりに高くして、到底普通の人間の觀念に入り難いところから、遙かに降つた菩薩と現れ、それで以つて、所有ものを救濟しようとする、その所作をさして、妙智の智といふたのであります。

さてそれなら何うして、其の救濟の念願を遂げるかといふと、それは、大慈悲、大智慧、大勇猛の力を、縱横自在に働かして、これを實現する、これを總稱して力といふたので御座います。

以上を概括して見ると、妙智力の三字には、觀世音の本性も、菩薩と現れた理由も、衆生救濟の精神も、機に應じ時に臨んで自在に身を變ずる工作も、その全部が含まれてゐるのであります。

更らに此の三字を、信者自身にあてはめて申しますと、觀音の妙智力とある、その觀音は、此の際に於いては、主觀的のものと覺るべきで、卽ち我が心の中にある觀音、言ひ換へると、本來誰れでも有つてゐる所の觀音精神を指したのであつて、その觀音精神が、外界にある所の、客觀的觀音の誘導により、啓發せられて、眞理を悟る所の微妙なる智慧を發揮し、然して、その働きより起る力を以つて、如何なる困難が輻輳しやうとも、よくこれに打勝つてゆくのであります。

卽ち、此の場合に於いては、觀音たる我が、人間たる我を救ふと云ふ、面白い現象を呈するので、妙智といひ、力といふも、就れも皆自分自身より發するのであります。思ふに信仰の極致は、必らず斯くあるべき筈のもので、觀音我に合し、我觀音に合し、兩者一となつて、茲に始めて、大火も燒く能はず、大水も溺らす能はず、

惡魔も障碍する能はず、夜叉も仇なす能はざる大威力が發揮されるのである。此處に至つた心境を、私は宗教的日本魂と呼んで居ります。

大乘的信者の念願

私は先きの講演の中に、印度や支那に於ける觀音信者の數は夥しいが、どうも其の信仰の狀況は、小乘的であり、利己的であり、消極的であると申しました。卽ちどうも自分が救はれたい、自分が解脫したいと自分本位にばかり願つてゐる、從つて其等の利生記を見ても、個人として救はれた例ばかりである。勿論、それも觀世音の慈悲の働きの中にあるには相違ないが、觀世音の本願とせられる所は、正しく皇國に於ける信仰の如き、大乘的の信仰でなくてはならない。

大乘的信者の念願とする所は、我と共に他をも救ひ、共に俱に正しい覺りに到達することを望み、更らに進んでは、國土の成佛、卽ち國家の理想的向上を期待し、

日本國が中心となつて、全世界を樂土と淨化し、以つて全人類の眞の平和と幸福とを實現せんとするにあるのでございます。

時間より申せば千三百六十餘年、其の間に於ける信者の合計は、恐らく幾億幾十億を算するであらう所の善男善女が、前述のやうな純信を以つて、御皇室と國家とに貢獻したる功績は、決して僅少なものではないでありませう。

田村麿將軍と東鄕元帥

私は此の多數の信徒の中から、古今に亘りて、二人の代表的人物を擧げて見やうと思ひます。卽ち、古代に於いては坂上田村麿將軍、近世に於いては東鄕元帥がこれであります。

田村麿將軍が熱心な觀音信者であつた事は世間周知の事實で播州淸水寺千手觀世音の申子と傳へられ、その化身とさへ言はれた程で、これ畢竟、彼の觀音信仰の熱

烈さが、深く世人を感動せしめてをつた事に胚胎したものと思はれるのであります。

東郷元帥に至つては、その信仰の基礎をなしてゐるのは惟神の道でありましたが、同時に深く觀世音を尊信して居られ、晩年には、世界的名手と言はれた高村光雲氏が、精神籠めて彫刻して贈られた千手觀世音の小像を、常に崇めてをられた程で、其の揮毫した佛菩薩の名號の、十の九までは觀世音であり、現に上野公園の清水堂にも、「千手觀世音」と書かれた額が奉納せられてあります。然うして田村麿將軍が、清水寺と切つても切れぬ不思議な因緣あるに對し、東郷元帥は淺草寺の願問となつて居られました。多數の神社佛閣中、元帥が願問を承諾されたのは、唯これ一つで、亦もつて其の信仰の程をも、窺ふに足るでありませう。

斯樣に兩將軍は、信仰上似通つた處がある許りでなく、他にも種々なる共通點を有つて居られます。

まづ第一に、孰れも朝廷のお覺え目出度く、彼は征夷大將軍に任ぜられ、これは

元帥の稱號を賜はつた。彼はさしも兇暴であつた蝦夷を征服して、皇威を北方に輝かし、これは日本海に大敵を擊滅して、一躍皇國を世界最强國に伍せしめた。彼の像には畏くも、嵯峨天皇親しく贊を遊ばされ、これの謹書は御物に入れられ、鄭重に御保存に相成つてをる。彼の帶びたる劍は御府に御藏めになつて坂上寶劍と御命名になり、これの帶せる軍刀は、國寶に指定せられてをる。彼の墓ずるや、一日廢朝仰出され、種々の御供物と役夫とを賜はり、更らに敕使を其の邸に遣されて、宣を傳へしめ、山城宇治郡栗栖村に、三丁の土地を賜りて墓地となさしめられ、これは薨去に際し、國葬を賜はるの敕書が下賜せられ、又敕使を御差遣になり、優渥なる御誄を賜はりて、之を靈前に宣讀せしめられ、國葬當日は、廢朝仰出されたるのみならず、發引の頃には、畏くも、聖上皇后兩陛下、御默禱遊ばされたりと、仄に拜承し奉つてをる。彼の遺骸は、甲冑を着け平安城に向つて棺中に立ち、この棺は、横にはなつて居れど、それを立てると、宮城に向ひ奉る位置におかれてあ

ります。

坂上、東郷の兩將軍が、圓滿無疵、八面玲瓏の大偉人となられたことは、天性にも由りませう。國體觀念にも由りませう。武士道の會得にも由りませう。惟神の道に立脚せるにも由りませう。併し、それと同時に、日本化された觀音信仰に依り人格完成の上に、一段の磨がかゝつたことは、私の信じて疑はざる所であります。

觀音信仰の一水兵

更らに今度は、私をして觀音信仰の一水兵の獻身的美談について、話させて戴きたい。

時は明治三十七年六月二十四日、その以前より、我が聯合艦隊の爲めに、旅順港内に押込められてゐた露國艦隊が、大擧して港外に進出し、我が艦隊に壓迫を受けて再び港内に逃込んだ。丁度その翌日の事でありました。

矢張り、此の役に從事してゐた我が水雷艇第六十三號は、戰に必要な物品を受取る爲め、母艦日光丸に横付しようと致しました。處が旅順の沖合のことですから、波もあり、長濤もあつて、兩方の艦が動搖するので、密接すれば相きしりて、小い水雷艇の方が、餘計に傷む恐れがありますので、斯ういふ場合には、或る距離まで近づくと、速力を止め、防禦物を舷から垂れ下げて、舷と舷との、摩合から起る損害を防ぐのであります。

處がどうしたことか、此の時には、水雷艇の速力も止まらず、防禦物も備はらないうちに、兩艦が密着するやうな狀況となりました。それが爲め、若し水雷艇の重要な部分が、破損することにでもなれば、大敵を前に控へた大切な場合に、或は其の任務を、果し得ぬやうなことにならぬとも限らない。

されば乘員一同は、アッと驚いて何れも手に汗を握つて、事の成行を見守りました。すると一人の水兵が、何の躊躇もなく、咄嗟に手摺に縋つて舷の外にぶら下

り、身體を防禦物の代りに致しました。その一刹那、兩艦の舷と舷とは何の容赦もなく、此の水兵を挾んで軋りあひました。如何に忠烈でも勇壯でも、肉體は肉體でありますから壊りません。彼の右脚はポキ〳〵と音立てゝ、見る〳〵肉破れ骨碎け、迸しる鮮血は、舷を朱に染めて流れました。

併し、彼が至誠の念力空しからず、水雷艇は無事に、母艦に横付せられてピタリと止り。當然潰されねばならぬ彼の身體も、右足の負傷のみに終りました。艇上の人々は彼の忠誠に感激の餘り、暫時は彼を引揚げることすら失念する程でありました。彼は滿身の力を搾つて甲板上に這ひ登り、常の如く直立して、擧手の禮をなしつゝ艇長に向ひ「艇は無事であります。」と報告しました。艇長は大きく頷きつゝ「よく行つて呉れた。負傷はどうか。」と言ひも終らず、彼の手を取つて握りしめました。すると彼は感謝の色を浮べつゝ『私の足ぐらい何でもありませぬ。」と答へましたが、安心と共にバッタリ其處へ倒れた。この水兵は藏田又一といふ人で、石川

縣の生れであります。

私は書つて初めて此の記事を綴るに當り、彼の眞心に泣かされてしまひました。何といふ健氣な擧動でありませう。前々より豫め覺悟して從事するのなら、縱しそれが決死的冒險の仕事であるにしても、我が忠勇なる將兵に取つては、何んでもないでありませう、併し、それが思ひもかけぬ突發事であると、ハッとして幾分躊躇するのが、人情の常であります。

然るにこの藏田水兵が、咄嗟に身を擲つて防禦物となつたのは、餘程信念決定した者でなければ出來ない業で、恐らく此の際に於ける彼の觀念には、我れ藏田又一もなければ、肉體もなく、たゞ其處には、軍人の本分たる忠節の一念が、烈々として火のやうに燃え立つたのでございませう。されば此の金剛不壞の覺悟に向つては大艦巨船を木葉のやうに弄ぶ海の惡魔も、一指を觸れることすら爲し得ず、彼をして思ふ存分、日本魂を活躍せしめたのは、何といふ痛快事でありませう。斯うい

ふのを佛敎では、身を以つて供養する大乘的菩薩行と稱へてをります。

國の力は信仰にあり

昨今私は、淺草寺に就いて調査した所に據りましても、觀音信者は、年々增加してゆく傾向が明かであります。然うして是らの信者は、必らずや職業の何たるを問はず、場合の如何なるかを論ぜず、純の純なる信念を以つて、常に其の職務に精進すること藏田水兵のごとき覺悟を以つてするでありませう。則ち夫れが、御皇室に對し奉る御奉公ともなり、國家に對する忠良な國民ともなるのでありまして、斯樣な人に取つては、公にも私にも、非常時などといふものは、全然あり得ないので御座います。ジョンソンは何と申しましたか、曰く、

「國の力は信仰にあり」——私の講座はこれを以つて終りと致します。(完)

昭和十三年十月十七日印刷
昭和十三年十月廿八日發行

定價金十五錢
送料三錢

著者　小笠原長生

發行者　佐々木詰山

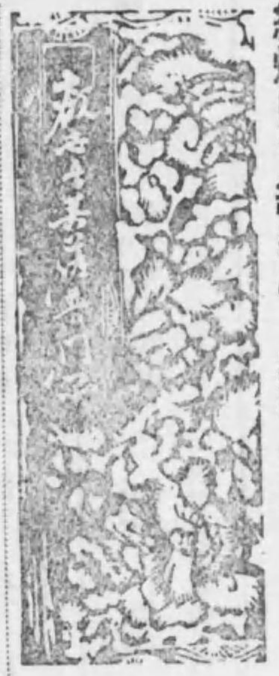
印刷者　山本禎男
東京市牛込區山吹町一九八番地

發行所　東京市牛込區天町一五七　和光社　振替口座東京四六二二六番

皇國に於ける觀世音の信仰
不許複製

神珍 觀音經 折本

絢爛目も綺羅めく豪華折本（紙製帙入）



絶對に他の追從を許さゞるこの内容!!

▲吳道子筆觀世音菩薩之圖
▲開經偈
▲妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第廿五（普賢、觀音）
▲延命十句觀音經
▲摩訶般若波羅蜜多心經

◉體裁
竪三寸七分
横一寸五分
表紙黑地金模様
同模様紙製帙入
内容黄紙十五折
鮮明印刷兩面刷
全文ふり假名付

◉定價
一部拾三錢
送料五部迄三錢

◉施本に好適
十部以上――一部拾壹錢宛
五十部以上――一部拾錢宛

護身即護國

忠勇なる皇軍は東方君子國の民として正義の大旆を掲げて既に起ちました。銃後を護る國民の精神を鼓舞し不動の信念を培ふには觀音經に如くものはありません。日夜ポケットに入れて守護ともなし、又常住坐臥肌身を離さず讀誦して靈感を味得されんことを望みます。

發行所
東京市牛込區辨天町一五七
和光社
振替口座東京四二六六番

386
615

終

和光社發行